

平成 14 年度～平成 17 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）

「聴覚言語障害児のリテラシーを高めるコミュニケーションアプローチの研究と教材開発」

（課題番号 14310144）研究成果報告書

# 聴覚・言語障害児のリテラシーの向上を目指して ーコミュニケーションを重視した指導と教材ー

平成18年3月

研究代表者 小田侯朗

（独立行政法人国立特殊教育総合研究所教育支援研究部）

# 目次

組織等について

研究の目的及び本報告書の構成

1. 聴覚言語障害児のリテラシーとコミュニケーション 小田侯朗…………… 1
2. 言語に障害のある子どもへのコミュニケーションアプローチ 牧野泰美…………… 8
3. SKY-HI カリキュラムにみられる乳幼児期のリテラシー 佐藤正幸 …… 11
4. ことばの教室における子どものリテラシーを高める  
コミュニケーションアプローチについての一考察 松村勘由・牛久保京子…………… 17
5. 聴覚障害児のリテラシー向上にかかわる指導について 宍戸和成 …… 22
6. 手話解説 DVD 教材「ごんぎつね」を用いた教科指導の取り組み 茶園浩志 …… 38

資料

# 組織等について

## 1. 組織

### 研究代表者

小田侯朗（独立行政法人国立特殊教育総合研究所教育支援研究部 総括研究員）

### 研究協力者

松村勘由（独立行政法人国立特殊教育総合研究所教育情報研修部 総括研究員）

牧野泰美（独立行政法人国立特殊教育総合研究所企画部 主任研究員）

横尾 俊（独立行政法人国立特殊教育総合研究所企画部 研究員）

佐藤正幸（筑波技術大学障害者高等教育支援センター 教授）

我妻敏博（上越教育大学 教授）

\*平成14年度～平成15年度までの研究代表者は宍戸和成（現：文部科学省視学官）が務めた。

## 2. 研究期間

平成14年度～平成17年度

## 3. 交付決定額

	直接経費	間接経費	合計
平成14年度	5,300	0	5,300
平成15年度	4,500	0	4,500
平成16年度	1,500	0	1,500
平成17年度	2,000	0	2,000
総計			13,300

（金額単位：千円）

#### 4. 学会発表等

- 小田侯朗・横尾俊・宍戸和成・市場裕子 聴覚障害児の障害認識に関する全国聾学校調査  
日本特殊教育学会第40回大会発表論文集 2002
- 小田侯朗 聴覚障害児教育とリテラシー  
聴覚障害 第58巻 5月号4-12, 2003
- 小田侯朗 聾学校における手話の活用をめぐって  
課題別研究報告書「聾学校におけるコミュニケーション手段に関する研究—教職員の  
手話活用能力の向上とこれを用いた指導のあり方の検討—」  
国立特殊教育総合研究所 1-13, 2005
- 佐藤正幸 情報保障 聴覚障害 57巻6月号 2002
- 佐藤正幸 聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業  
一般研究報告書「聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業」  
独立行政法人国立特殊教育総合研究所 2003
- 宍戸和成 聴覚障害教育における実践研究の動向—コミュニケーション活動を中心に—  
特別支援教育 No. 8 58-61.
- 牧野泰美・松村勘由 コミュニケーション障害における子どもへの教育的援助  
教育と医学 第50巻10号 2002
- 牧野泰美 コミュニケーション関係の観察・評価・支援に向けた「関係」概念への接近  
一般研究報告書「障害児のためのコミュニケーション関係観察評価法と関係支援プロ  
グラムの開発」  
独立行政法人国立特殊教育総合研究所 2003
- 牧野泰美 第40回大会シンポジウム報告：「関係」への援助と言語指導（その3）—関わり手  
と周囲他者との関係に視点をおいて—  
特殊教育学研究 第40巻5号 2003
- 松村勘由 ことばが通じにくいこと  
発達の遅れと教育 平成14年12月号 2002
- 松村勘由・牧野泰美 我が国における言語障害教育をとりまく諸問題—変遷と展望—  
独立行政法人国立特殊教育総合研究所研究紀要 2004
- 横尾 俊 聾学校におけるコンピュータ利用についての研究  
独立行政法人国立特殊教育総合研究所研究紀要 30巻 2003

## 研究の目的及び本報告書の構成

本研究では近年特に重要性が増してきた聴覚言語障害児の読み書き能力（リテラシー）に焦点を当て、授業等における多様なコミュニケーション活動を複合させたりテラシー向上支援のための方法の検討とそれにかかわる教材開発を目的とした。

具体的にはリテラシー向上におけるコミュニケーションの重要性について概括するとともに、実践例に基づき様々な角度からリテラシーとコミュニケーションの関係を報告した。これに基づき本報告書は以下の論文等によって構成された。

まず研究代表者の小田侯朗が本書の基本となるリテラシーとコミュニケーションの関係をまとめた。

次に各論として、それぞれの研究協力者がコミュニケーションを重視したりテラシー向上への取り組みについて実例を挙げて報告した。

牧野泰美は言語習得や言語が機能するためにコミュニケーションが重要であることと、コミュニケーションティブアプローチの意味を述べた。

佐藤正幸は幼児期のリテラシーの発達に関する論文を紹介し解説した。リテラシー発達のために、環境整備や家庭を中心とした言語コミュニケーションの経験が大切であることを述べた。また早期のリテラシー導入についても具体的プログラムを紹介した。

松村勸由・牛久保京子は長期にわたる子どもとのコミュニケーションを基にした書きことばの指導実践事例を提供した。

宍戸和成はこれまでの聾教育における言語指導を振り返り、コミュニケーションを喚起する題材を用いた「考える」こと、「読み取る」ことを重視する授業のあり方について具体的な例に則して考察した。

茶園浩志は熊本県立熊本聾学校で取り組んでいる手話と日本語のバイリンガル教材 DVD を用いた授業について紹介した。

また上記のインターラクティブな教材の開発もこの研究の一環として行われたので、そのスベック（試作段階）についても資料として紹介した。